

7月より鹿児島県労働委員会の使用者委員を務めることになりました。「一方聞いて沙汰するな」(by篤姫)の心構えを持って、双方の意見をよく聞き、労使間の安定と正常化に努めたいと思っております。

さて、気象庁の速報値によると九州南部地方の梅雨は、7月28日頃(昨年より4日、平年より14日遅く)明けた。5月30日頃梅雨入り(昨年及び平年より1日早く)したので、平年より15日も長い梅雨だった。この期間の降水量(速報値)は、鹿児島で1525ミリ、平年の降水量が741.2ミリであるから約2倍の雨が、長期に渡って降り続いたことになる。ちなみに7月28日頃は、平年の東北北部地方の梅雨明けである。立秋の8月7日、仙台管区気象台は「東北北部について速報としては梅雨明けを発表しない」と発表した。梅雨明けの発表は、夏の期間である「立秋」までを目安としており、今年の梅雨明けの発表は無く、9月の始めに確定値を公表する予定とのことであった。ちなみに八六水害の年、1993(平成5)年は、沖縄・奄美地方以外は、梅雨明けが特定されなかった。九州南部で梅雨明けが特定されなかったのは、この年の1回だけである。

「梅雨明け十日」という言葉がある。梅雨明け直後は、太平洋高気圧やチベット高気圧の勢力が強く、晴天による猛暑が続くというものだ。それにしても今年は異常な猛暑が続いた。鹿児島市の猛暑日(最高気温が35℃以上の日)は、8月23日現在、13日(昨年は7・8月の2ヶ月で1日)しかも8月12日より8日連続、最高気温も37.0℃を記録した。最近では2017年が、猛暑日13日、2013年が28日という記録がある。2017年は、6月6日梅雨入り・7月13日明け、2023年が、5月27日入りの7月8日明けといずれも梅雨期間が短く、降水量も前者が平年の91%、後者も同77%と少ない。どちらかといえばカラ梅雨といえるので、暑くなるのも納得できるが、今年のように梅雨が長く、降水量も多く、しかも猛暑というのは、あまり記憶にない。マスク着用での猛暑は、まさに酷暑であった。

今年の夏でもう一つ異変があった。それは7月に台風の発生が一つもなかったことである。気象庁によると7月の台風発生ゼロというのは、1951年以降の統計史上初の事例だそうだ。「ボイス・バロットの法則」と言うのがある。これは、風を背中を受けて立ったとき、左手前方(南半球は右手前方)の方向に台風(低気圧)の中心があると言うものだ。この法則を知っていれば、鹿児島市の場合、台風が東シナ海を通過の予報なら風向きは北東→東→南東→南、太平洋側だと北東→北→北西→西と変わる。故に、予報を見て、建物のどちら側をより強固にして備えれば良いかがわかる。一方、今年発生した「新型コロナウイルス」という台風は、どこまで発達(感染拡大)し、どんな進路(収束の道筋)を辿るのか未だに見えない。今判ることは、風向と風の強さだけである。進路は不明である。従って、治療薬やワクチンが開発され、進路が見えるまでは、風で飛ばされそうな鉢植え等を片付け、戸締り(感染予防対策)をしっかりとすること。即ち、徹底した感染防止対策で「うつらない・うつさない」行動を続けるしかない。一刻も早く新型コロナウイルス感染症が収束することを願って・・・